

# 韓国で破れた夢、日本で咲かせる リチウムイオン電池の部材で急成長

キラキラ輝く高級ハイブリッドカー。ドイツの自動車メーカーのBMWが昨年12月、東京モーターショーでお披露目したエコーカーの最新シリーズに、ある日本のベンチャー企業が大切に育ててきた部材が使われていることを知る人は少ない。

ダブル・スコープは、スマートフォンから電気自動車まで幅広く使われている、リチウムイオン電池のセパレーター（分離膜）と呼ばれるフィルムを作る材料メーカーだ。日本に本社、韓国に工場を抱えており、約130人の社員が日々開発から営業まで奔走している。

じつはこのセパレーターは、これまで大手化学メーカーの独壇場だった。

なぜなら高い開発力に加えて、工場には10億円単位の設備投資がある。さらに家電やクルマの安全性を守るため、メーカー側は新しい電池材料の品質テストには長くて2〜3年かかり、中

小企業がいくらサンプルを納入しても相手にされなかった。そんなベンチャー泣かせの世界に、2005年に殴り込みをかけたのが、韓国出身の崔元根だ。

**自信作の電池素材  
母国で相手にされず  
日本企業の出資を受ける**

崔はソウル市に生まれ、子どもの頃から起業を夢見てきた。「カバン一つ、プロペラ飛行機で世界中を飛び回るビジネスマンを映画で見てね。それで将来を決めました」。大学では電気を学び、1994年に大手電機メーカーのサムスン電子に入社した。

仕事は昼夜を問わず、猛烈にこなすタイプ。花形の液晶ディスプレイの事業部で、もつと利益を上げたいと考えるうちに「テレビメーカーより、テレビに使うフィルムメーカーが高収益を上げている」ことに気づいた。



Toshiaki Usami

生産していた日本だった。ベンチャー支援に注力する知人を頼みに、技術を売り込んだのだ。反応は早かった。元ソニー幹部などが運営するベンチャーキャピタル、TNPパートナーズが、早々に出資を約束し、すぐに10社計10億円の資金が集まった。「石、金、ダイヤモンドを見分ける目があった」。唯一の条件は、日本企業として起業することだった。

日本での起業は、韓国に工場を造ろうと考えていた崔に、思わぬ恩恵をもたらした。ダブル・スコープは外国企業として扱われるため、外資系企業への優遇措置を受けられたのだ。7万6000平方メートルの工場用地は50年間タダ。そこに念願の生産ラインを運び込んだ。

そして07年、ついに日本のハイブリッドで誕生した量産品の出荷が始まった。

## ダブル・スコープ社長

W-SCOPE

# 崔 元根

チョイ・ウォンクン／48歳、韓国ソウル市出身。サムスン電子で液晶ディスプレイ事業などを担当。2005年に神奈川県でダブル・スコープを創業し、韓国へ逆進出。流暢な日本語を操る。

# 起・業・人

Number 387

**◆殿様商売のスキ突き  
中国、韓国メーカーから  
ビジネス拡大**

崔は、納入先としてまず、圧倒的な高品質にこだわる日本メーカーではなく、中国などの電池メーカーに目をつけた。

「新しい電池を作りましょうよ」。こんなせりふは、相手の心によく響いた。大手材料メーカーは、細かい仕様変更や価格納期について相談しても、なかなか応じてくれないという不満を抱えていた。そこをフオロするうちに、中国や韓国で徐々に納入先を増やしていった。

**幸** 運もあった。車載用リチウムイオン電池などで頭角を現した米国の電池メーカー、A123が、大口納入先に決ま

てショックを受ける。「未来はデジタル機器ではなく、化学とアナログ技術にある」。そんな直感から、徐々に起業へのアイデアを集めていった。2000年、サムスン電子を退社すると旧知の化学メーカーの技術者らと共同で、高機能フィルムの開発に乗り出す。そして03年、リチウムイオン電池に使うセパレーターの生産に成功したのだ。

ポイントとは、生産効率とコスト力に絞った、独自の材料と生産工程にあった。「行ける」。05年に起業を決断した。

**と**ころが、韓国の電池メーカーを訪ねても、誰からも見向きもされなかったのだ。「これ、（業界トップメーカーの）旭化成のフィルムじゃないの」。サンプル品を手渡し、ていねいに技術の説明をしても、自分たちで作ったことすら信じてもらえない始末だった。「あの人は詐

った。それが冒頭のBMWの最新のハイブリッドカーに採用されたのだ。

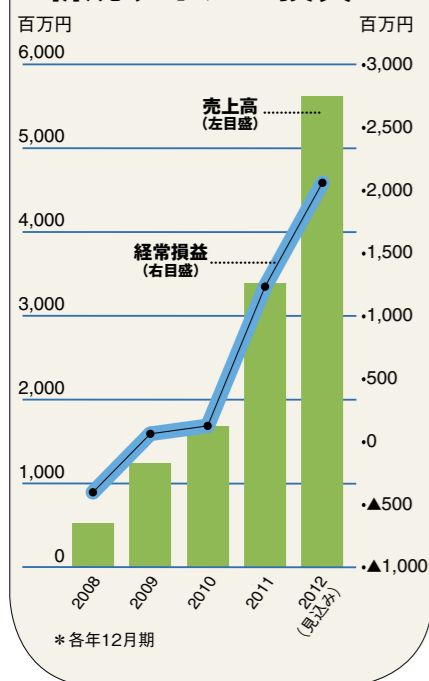
高い利益を稼いでいたリチウムイオン電池メーカーが、コスト競争に突入したことも追い風になった。反応が薄かった日本メーカーとの商談も始まった。

現在、世界のリチウムイオン電池用のセパレーターの市場規模は約1000億円。旭化成、東レ東燃、セルガードの上位3社が8割近くを占める寡占市場に、同社は5%という「風穴」を開け、昨年12月には東証マザーズへの上場を果たした。

「3年後のシェアはたぶん20%に上がっています」。崔の描く夢は、もはやベンチャーの枠にとどまらない。

（敬称略） 本誌・後藤直義

## 売上高は30億円超！ 高い収益力で 新規ラインに投資



## わが社は これで勝負！

同社が製造する、リチウムイオン電池の主要部材のセパレーター（分離膜）。微細な穴が開いている巨大なフィルムシートを、用途ごとに切り分けて、世界中の電池メーカーに納める。フィルムは医療用途への応用も検討中

